

ワークショップの企画・運営を体験した学生の成長 —光る泥団子をテーマとした「卒業課題研究」における取組み—

春原 淑雄

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(令和5年3月9日受理)

**Student Development through Experience in Workshop Planning and Management :
efforts in “graduation project research” with the theme of shining mud dumplings**

Yoshio HARUHARA

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior College*)

(Accepted March 9, 2023)

Abstract

This paper reports on the efforts of the “Graduation Project Research” students who worked to hold the “Art Mud Dumpling Workshop” in FY2021. In the process, we examined their growth, depicting the students’ experience of the series of processes from workshop planning, program design, environmental configuration, and implementation. The results suggest that workshop planning and management may enhance students’ “ability to step forward” and “ability to think situations through”.

Keywords: ワークショップ : workshop
学生の成長 : student development
泥団子 : mud dumplings
卒業課題研究 : graduation project research
社会人基礎力 : fundamental competencies for working persons

1. はじめに

筆者の担当する「卒業課題研究」では、2019年度から子どもが大好きな遊び「泥団子作り」をテーマとした活動を継続展開している。

2019年度は、公園などの身近にある土を使用した光る泥団子の作り方について研究を進めた。また、絵具やポスターカラー、炭を使用して泥団子への着色を試み、泥団子のアレンジの可能性について示唆を得た。2020年度は「泥団子をアートへ」をテーマとして掲げ、漆喰を利用した泥団子への着色技法の開発とその習得を目標に活動した。着色には漆喰に水彩絵具を混ぜる方法を採用し、泥団子への着色に成功した¹⁾。そして、このカラフルでびかびか光る泥団子を「アート泥団子」と名づけた(図1)。



図1 学生たちが制作したアート泥団子

2021年度は、「アート泥団子の魅力発信プロジェクト」と題して、学生たちが中心となり「アート泥団子ワークショップ」の企画・運営をおこなった。アート泥団子の魅力は、光沢とともに色の濃淡のある自然な模様が現れてくる点にある。その色味や模様は団子の形状や漆喰の塗り重ね方によって異なり、世界に1つしかない泥団子が出来あがる。まさに「アート」である。「子どもから大人まで多くの人この魅力を体感してほしい」これが学生たちの思いである。

本稿では、2021年度「アート泥団子ワークショップ」の開催を目指して活動した「卒業課題研究」の取り組みについて報告する。そのなかで、ワークショップの企画、プログラムの設計から環境構成、そして実施までの一連のプロセスを体験した学生たちの姿を紹介しながら、彼らの成長についても検討する。

2. なぜワークショップなのか

ここで、2021年度の卒業課題研究において、なぜワークショップの企画・運営に取り組んだのか、その理由を2つ述べておく。

1つ目の理由は、「アート泥団子の魅力を体感してほしい」という学生たちの思いを叶えるには、ワークショップが適していると考えたからである。中野²⁾は、ワークショップとは「講義などの一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者自らが参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」と定義している。つまり、さまざまな人や物、出来事の出会いや触れ合いの場となり、参加者として他者とともに生きる学びのスタイルだといえる³⁾。ワークショップというスタイルを採用することで、アート泥団子の魅力体験、さらにその魅力を参加者ならびに学生間で共有することが期待できる。

2つ目の理由は、ここ数年の学生たちの質的な変化である。日々の短大教育のなかで、目の前の学生たちの変化に気づきはじめた。筆者が所属する学科は、保育者養成を主たる目的としている。しかしここ数年、将来保育者を目指している学生であるのに、「礼儀やマナーに対する意識が低い」「人見知りで人との交流や人前での発表が苦手」「生活経験や体験が不足している」といった学生が増えてきた印象がある。実際、実習先や就職先となる幼稚園・保育所等からも、「礼儀・マナー、仕事への意欲、主体性の向上が必要」「報・連・相を基本として、チームで仕事を進める力が必要」「ボランティア、自然体験、生活体験などさまざまな経験を積んでほしい」など、学生教育に対する意見が寄せられている⁴⁾。このような学生たちにとって、ワークショップの企画・運営に携わることは、主体的な行動発揮、人々との関係作りや交流、さらに地域社会での体験活動の機会を生み出し、彼らの学びや成長につながることを期待できる。

3. ワークショップ開催に向けた1年間の活動プロセス

学生たちの1年の活動プロセスを図2に示す。2021年4月、6名の学生たちと「卒業課題研究」をスタートさせた。5月から6月にかけては、アート泥団子の制作に必要な技法習得を目指し、泥団子の制作に没頭した。この期間で学生たちはアート泥団子を完成させることができるようになった。並行して、ワークショップの企画・運営の土台となるコンセプトの検討をおこなった。筆者がファシリテーターとなり、学生たちとディスカッションをおこない、コンセプトを決定した(表1)。泥団子を作りながら学生たちが感じた思い(「子どもから大人まで多くの人この魅力を体感してほしい」)を反映し、親子で泥団子作りを楽しむことを重視するものとなった。

さて、ワークショップを開催するためには、われわれの制作方法で、はじめての人でもアート泥団子をきれい



図2 ワークショップ開催までの活動プロセス

に作ることができるのか、この点を確認する必要がある。そこで、7月から8月にかけて、本学エルダーカレッジでプレ・ワークショップを実験的におこなうことにした。以降では、まず、エルダーカレッジ生を対象としたプレ・ワークショップでの実践について述べる。次に、プレ・ワークショップをとおして見えてきた課題を改善し臨んだ、小学生親子を対象としたワークショップ本番での実践を中心に述べていく。

4. エルダーカレッジ生を対象としたプレ・ワークショップの実践

(1) プレ・ワークショップの概要

名称 「アート泥団子講座」 in エルダーカレッジ^b
 日時 ① 2021年7月26日(月) 13時～14時30分
 ② 2021年8月5日(月) 13時～14時30分
 場所 健康福祉・生涯学習センター
 参加者 10名(男性2名、女性8名)
 ファシリテーター 学生6名、教員1名

(2) プレ・ワークショップのプログラム

エルダーカレッジの授業時間(90分)、はじめて作る参加者であることを考慮して、2日間に分けたプログラムをデザインした(表2)。1日あたりの活動時間は、60～70分程度に設定している。2日間で終わるよう、泥団子の芯は、あらかじめ学生が制作し用意しておいた。

(3) プレ・ワークショップの様子と参加者の感想

10名の参加者がはじめて「アート泥団子」作りを体験した。学生たちは泥団子研究の成果を活かして、ファシリテーターとして活動をサポートした(図3)。学生たちはワークショップ開始から終始緊張した様子もなく、参加者に笑顔で関

a 本学健康福祉・生涯学習センターが実施しているシニアを対象とした教養大学。
 b 令和3年度前期エルダーカレッジ本科1年生の授業「体験から学ぶ生きがい活動」を利用して実施した。

わることができていた。また、次々と出てくる参加者からの質問に対して、一つひとつ丁寧に対応していた。口頭で説明したり、実際に作り方を示範してみせたり、ときには参加者と代わったりしながら一緒に泥団子を作

c 学生たちはワークショップや体験講座に参加した経験がなかった。そこで、エルダーカレッジ生と共に「体験から学ぶ生きがい活動」を受講してもらい、体験講座「石ころアート」「新聞紙 de スポーツ」に参加してもらった。そのため、エルダーカレッジ生とは既知の間柄であった。

表1 ワークショップのコンセプト

タイトル	保育×左官＝アート!! アート泥団子ワークショップ
目的	・短大生、保護者と協同しながら、子どもたち自身の手でアート泥団子を完成させ、達成感を味わってもらいたい。 ・アート泥団子作りをとおして、日本の伝統的な壁材「漆喰」を知り、身近にある漆喰を使用した建造物に興味を持ってほしい。
内容	・カラフルでぴかぴか光る美しい泥団子を制作する。 ・アート泥団子が美しく光る理由として、日本の伝統的な壁材「漆喰」を紹介し、生活環境への好影響や身近にある漆喰を使用した歴史的建造物についても紹介する。
日程	令和4年1月23日(日)
場所	西九州大学短期大学部 6号館 美術工芸室
対象	小学生の子どもとその保護者、定員30名
ファシリテーター	ゼミ学生6名、教員1名

表2 プレ・ワークショップのプログラム

主な内容		具体的な活動内容
1日目(7/26)	1 ミニ・レクチャー	①アート泥団子の魅力を伝える(作品紹介を含む)。 ②アート泥団子の作り方を解説する。
	2 泥団子制作①	中ぬりをして泥団子をきれいな球体にする ①土に水を加え、ぬるぬるの状態し、中ぬりを作る。 ②中ぬりを団子の表面に指で薄くぬり、乾かす。 ③団子をビンの上で回転させる。(①～③を数回繰り返す。)
2日目(8/5)	3 泥団子制作②	泥団子に着色をする ①漆喰クリームに水彩絵具を混ぜて、色つき漆喰クリームを作る。 ②色つき漆喰クリームを団子の表面に筆で塗り、乾燥させる。 ③ビンの口で円を描くように漆喰クリームを塗り広げる。(②～③の工程を数回繰り返す。)
	4 泥団子の磨き上げをする	①3-③と同じ要領で力を入れながら、団子の表面を磨く。 ②光沢が出たら、オリーブオイルを少量塗り、柔らかい布で磨く。



図3 学生による参加者への実演やアドバイスの様子



図4 上：エルダーカレッジの皆さんが制作したアート泥団子
下：完成したアート泥団子をもって記念撮影

作る姿もみられた。参加者は熱心に粘り強く取り組み、世界にひとつしかない自分だけの泥団子を完成させていた(図4)。サポートした学生たちも自分が作る時とは違った満足感が得られたのではないだろうか。以下は、参加者の感想の一部である。

- 泥団子とは思えない。家で見せても信用されないかも。やっぱりアートですね。
- 出来上がった泥玉の作品を目にして本当に感無量です。作品名は「絆」にします。
- 現役を退くと、物事を達成する喜びが減っていきます。久しぶりに物事の達成感を味わうことができました。

(4) 見えてきた課題

ワークショップ本番では、小学生親子が対象となる。

この点から、プレ・ワークショップを振り返ると、以下に示す3つの課題がみえてきた。

1つ目は、プログラムの短縮である。今回は、エルダーカレッジの授業時間、アート泥団子をはじめて作る参加者を考慮して、中ぬりの工程と着色の工程を別日に分けるプログラムとした。しかし、小学生が継続して2回のワークショップに参加することは難しい。そのため、1回のワークショップで泥団子が完成できるように、プログラムを短縮することが求められる。2つ目は、アート泥団子の制作工程の見直しである。プログラムを短縮するためには、制作工程をより簡素化する必要がある。例えば、中ぬりの工程を省略してもきれいな仕上がりとなるよう、さらなる教材研究を進めることが必要である。3つ目は、作り方の説明方法の工夫である。説明文と写真を載せたPowerPointのスライドを用いて説明をしたが、はじめて作る人には十分に伝わらない場面が多々あった。そのたびに学生や筆者がエルダーカレッジ生の側で実演して見せて、作り方を理解してもらった。説明時に学生による実演をおこない、その手元をカメラで撮影し、スクリーンに拡大投影するなど、より分かりやすい説明方法の検討が必要である。

5. 小学生親子を対象としたワークショップ本番の実践

(1) 開催に向けた教材研究とプログラムの修正

プレ・ワークショップでの実践から見えてきた課題の改善を目指して、10月～11月はアート泥団子の試作と改良を繰り返した。その結果、中ぬりの工程を省略しても、漆喰を厚めに塗り重ねることで、きれいに仕上がるのが分かった。これにより、従来にくらべて40～50分時間短縮ができ、60～80分でアート泥団子を完成させることができるようになった。ただ、その一方で、参加者がワークショップ内で土に触れる機会が少なくなってしまう。土に触れる機会を保証するため、泥団子の芯を削る工程をプログラムに追加することにした。

また、アート泥団子はその特徴である光沢を生み出すために、材料として漆喰を使用している。漆喰について、プレ・ワークショップに参加したエルダーカレッジ生は知っていたが、ワークショップ本番の対象である小学生ははじめて見聞きすることが予想される。そこで、泥団子を美しく光らせるために、日本の伝統的な壁材「漆喰」各工程の詳しい手順や内容は、春原(2022)に掲載されている。

表3 修正したワークショップのプログラム

	時間	目標	活動内容	場の設定
1	9:30 (30分)	・会場に誘導し、受付をする。 ・くつろいだ雰囲気を作る。	・駐車場から会場建物へ誘導する。 ・受付(撮影許可を含む)し、検温、手指消毒後に入室する。 ・座席に誘導し、名札テープに名前を書く。 ・BGMを流す。 ・泥団子映像、お手洗いの案内などスライド表示する。 ・来場者に適宜、声掛けをする。 ・展示コーナーを紹介する。	誘導係配置、案内板設置、受付机、名簿、座席表、体温計、養生テープ、ネームペン、座席札、PC、BGM、映像スライド、配布資料一式
2	10:00 (10分)	・オープニング ・作りたい気持ちを高める。	・主催者挨拶(ゼミとメンバーの紹介) ・泥団子の実物を見て触ってもらう。 ・本日のねらいや進め方を確認する。	スライド、泥団子見本
3	10:10 (10分)	・作り方のを知る。	・レクチャー「アート泥団子の作り方」	スライド、作り方の説明書
4	10:20 (70～80分)	・泥団子づくりを楽しむ。 ・漆喰について知る。	・体験「アート泥団子の制作」 ①ピンを使って団子を丸くする。 ②漆喰クリームを3～4回程度塗り重ね、ピンでこする。 ※漆喰を塗るときのポイントは？ ③磨き上げる。 ※漆喰を磨く時のポイントは？ ②の工程でワンポイント解説「漆喰と活用例の紹介」をする。 (制作過程へのバラツキの対応) ・写真撮影スポット ・持ち帰り用の箱に入れる	サポート学生の配置、スライド、作り方の説明書、Webカメラ(手元作成用) 写真撮影スポット、持ち帰り用の箱、緩衝材
5	11:40 (10分)	クロージング	・終了挨拶(漆喰を使った建物、普通の土で作る泥団子の紹介を含む) ・全体で写真撮影 ・会場アンケート	カメラ、三脚、鉛筆

を活用していることをミニ・レクチャーし、漆喰を使用した歴史的建造物を紹介する内容をプログラムに追加することにした。

以上の検討を踏まえて修正したプログラムを表3に示す。

(2) 参加者の募集活動

教材研究と並行しながら、11月～12月にはチラシとポスターを作成し、募集活動を開始した。佐賀市内の小学校1校にチラシの配布と校内でのポスター掲示を依頼した(図5)。その他、佐賀市内の児童館5館、佐賀市立図書館本館にもチラシ設置とポスター掲示をお願いした。募集開始の翌日には、申込定員(10組30名)に達した。その後も多数の問い合わせがあり、キャンセル待ちの申込みもおこなった。

(3) ワークショップの概要

名称 保育×左官＝アート!!

アート泥団子ワークショップ

日時 2022年1月23日(日) 10時～12時

場所 西九州大学短期大学部6号館 美術工芸室

参加者 7組15名(小学生7名、大人7名、年中1名)

ファシリテーター 学生6名、教員1名

(4) 会場の環境構成

新型コロナウイルスの感染防止対策をおこないながら、参加者がアート泥団子の魅力を体験できるよう、興味・関心の喚起、スムーズな進行とわかりやすい説明を

e 1月に入り新型コロナウイルスの感染が拡大、その影響を受けキャンセルが相次いだ。



図5 小学校へのチラシ配布とポスター掲示の依頼

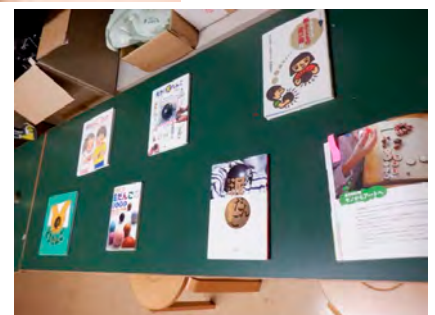


図6 会場内の展示コーナー

(上:さまざまな泥団子、下:泥団子関連書籍)

意識して、会場の環境を整えた。基本的なコロナウィルス感染防止対策として、受付での検温・健康状態の確認・手指消毒をおこなった。また、参加者間の距離を十分確保できる座席配置にし、飛沫防止対策としてマスク

とフェイスシールドを着用した。「泥団子がこんなに光るの!」「作ってみたい」といった参加者の興味・関心を高めるため、会場内に展示コーナーを設け(図6)、ワークショップ開会前に参加者を案内できるようにした。参加者の机上には、必要な材料と道具一式をトレーにセッティングし、スムーズかつ集中して泥団子が制作できるよう準備した(図7)。



図7 アート泥団子制作セット一式

なお、課題の1つとしてあがっていた作り方の説明方法については、スライドによる口頭説明に加えて、参加者の手元資料として説明書「アート泥団子の作り方」を新たに用意した。裏面は、佐賀市内の歴史的建造物を紹介する資料「漆喰を使った建物」となっている(図8)。

アート泥団子の作り方 作り方をおぼえて、カラフルでびかびか光る泥団子を作ろう!

【練習】ピンの使い方 泥団子を光らせるためには、ピン(小)を使ってみよう。ピン(小)の口を泥団子にあてるように軽く押しあて、円を描くようクルクルと動かしましょう。

1 団子をまるくする ピン(大)の口の上に団子をおきます。手で丸くすると団子を回転させて、団子を削ります。けずる目安は、団子がピン(大)の口とぴったり合うことです。

2 色しっくい作り しっくいに絵の具を適量混ぜて、色しっくいを作ります。絵具を少しずつ入れて好みの色にしていきます。**※絵の具の入れすぎに気づけて**

3 ぬりつけ作業 ピン(大)の上に泥団子をおいて、筆で色しっくいぬっていきます。なるべく早く、そして薄く、全体をぬっていきます。その後、うちわで乾かします。**※ぬかず目安は色しっくいが手につかない程度**

4 こすり作業 練習でしたように、ピン(小)の口でクルクルと円を描くように動かして、団子をこすっていきます。**※軽くこする ※こすりすぎない(100回程度)**

5 ぬりつけとこすり作業 ③と④の作業を、3~4回くり返しましょう。最後にもう一度、色しっくいを塗り、生乾きのうちに、ピン(小)の口で円を描くようにぬりつけていきます。

6 みがき作業 ピン(小)の口でひたすらこすります。5分ぐらいすると「キョキョッ」と音がしてきます。団子が光ってきたら、完成です。**※光ってきたらみがき過ぎないように**

【補修の仕方】 ⑥の作業で光らない部分が出てくる場合があります。へこみがあり、ピン(小)の口が当たらないからです。光っていない部分にもう一度色しっくいを塗りつけて、補修してからみがくと、均一に光るようになります。

西九州大学短期大学部 幼児保育学科 青原ゼミ

漆喰(しっくい)を使った建物 佐賀市内にもしっくいを使った歴史的な建物がたくさんあるよ!

- 佐賀市歴史民俗館** 〒840-0823 佐賀市南町2番9号 0952-22-6849
佐賀市歴史民俗館は、現代に残る歴史的建造物を後世に伝えるとともに、市の財産として役立てようとする整備・保存しています。現在、7つの歴史的な建物が残っています。その中には外壁はもちろん、内壁にも漆喰を使っている建物があります。
- 山口亮一旧宅** 〒840-0047 佐賀市南町1368番地 0952-60-2978
佐賀出身の画家。故郷の風景や花など日本画、洋画を通じみずみずしい作品を多く残しています。建物の外壁は、街路に接する面に彫高の壁飾をはめてあり、その上部を漆喰で塗ってあります。
- 佐賀県立佐賀城本丸歴史館** 〒840-0041 佐賀市城内2-18-1 0952-41-7550
佐賀藩10代藩主鍋島直正が再建した佐賀城本丸跡の一部を復元した歴史博物館です。外壁と内壁に漆喰を使っています。鍋島直正の居場所だった御儀間(向かう道路の途中にも一部漆喰を使っている部分があります)。
- 前田邸** 〒849-0902 久保町上和屋
戦前までの地域の地主。外壁には白い漆喰ではなく、当時「粋」とされた黒漆喰が使用されています。
- 大坪邸** 〒840-0854 佐賀市南町1-30-30
旧長崎街道沿いの歴史的景観を形成する重要な建築物。米屋を営んだ町家。2階の大きな窓と中央に設けられた漆喰仕上げの戸袋が目を惹きます。

図8 参加者用の説明書

(上:アート泥団子の作り方、下:漆喰を使った建物)

さらに、泥団子作りの実演をおこない、その手元をカメラで撮影し、スクリーンに拡大投影できるように機材を準備した(図9)。従来のスライドによる口頭説明に加えて、説明書、実演映像を利用することで、作り方がより具体的にイメージしやすくなることをねらっている。

(5) ワークショップの様子

修正したプログラムにもとづきながら、筆者が進行を担当、学生たちは誘導・案内・受付、泥団子制作のサポートなど参加者と関わる役割を中心に担当した。最終打ち合わせ時に、参加者が過度に緊張しないよう、くつろいだ雰囲気作りをめざすこと、そのため笑顔で学生たちから声をかけていくことを確認した。

ワークショップ開始前、学生たちは2人1組となり、会場への誘導、受付、会場内の案内を担当した。会場への誘導担当は、本学正門前と6号館入口に立ち、来学した参加者へ声をかけ、会場への行き方を案内した。受付担当は、会場入口の受付において、氏名と健康状態の確認、写真撮影の許可取り、座席の案内をおこなった。会場内の案内担

f 体温を測定し、身体症状(風邪の症状、倦怠(けんたい)感、呼吸困難、嗅覚や味覚の異常)を確認した。



図9 泥団子作りの実演とスクリーンへの拡大投影

当は、受付を終えた参加者に名札テープを渡し、指定された座席へと誘導した。学生たちは普段とくらべると緊張した面持ちではあったが、参加者親子に適宜声をかけることができていた。泥団子の実物や関連書籍を並べた会場内の展示コーナーに参加者を誘う姿もみられた。

ワークショップ開始後、泥団子の制作工程ごとの参加者の様子を図10に示す。漆喰を塗りビンで磨くことを繰り返す工程は、はじめて作る参加者には難易度が高く、学生たちが漆喰の塗り方や瓶で磨く際の力加減など、参加者の傍らで実演しながらアドバイスをした。泥団子の制作が進むにつれ、学生たちの緊張感も次第に解け、参加者親子と会話を楽しむ様子もみられた。2時間と長時間のワークショップであったが、子どもも大人も集中して取り組む姿が印象的であった。経験豊かな学生による充実したサポートもあり、参加者全員がアート泥団子を完成させることができた。

(6) 参加者アンケートの結果

参加した小学生親子7組に、図11に示す項目からなるアンケートに回答してもらった。ワークショップの総合的な満足度は、「大変満足」が100%であった(図12)。その評価の理由は、①ぴかぴかの泥団子が完成したこと、②学生・教員のサポートが充実していたこと、③親子で夢中になる体験ができたことの3つにまとめられる。

今後のワークショップ運営の参考にするため、「内容」「進行のスムーズさ」「説明の分かりやすさ」「資料の見やすさ」「スタッフの対応」の各項目の満足度もたずねた(図13)。満足度はどれも高い結果となっているが、「進行のスムーズさ」や「説明の分かりやすさ」に改善の余地がある。早く泥団子を作りたい参加者に対して、冒頭のねらいや進め方の確認、作り方の概要説明が少し長かったのではないだろうか。ただその一方で、ワークショップのねらいやルールの確認は、参加者の行動指針となるもので

欠かすことはできない。できるだけ端的に説明するとともに、ねらいやルールは模造紙に書いて会場内に掲示し、参加者からいつでも見えるようにするなどの工夫が必要である。

また、ワークショップに参加したいかどうか(リピート傾向)をたずねたところ、全回答者から「また参加したい



① 団子の芯をまん丸に削る



② 漆喰に色をつけて団子の芯に塗っていく



③ 漆喰を塗りビンで磨くを繰り返す



④ 完成! 子どもの頑張りにお母さんも笑顔



学生によるサポート: 漆喰の塗り方



学生によるサポート: 漆喰を乾かす

図10 ワークショップ当日の参加者の様子と学生のサポート

Q1. ワークショップに関する総合的な満足度を教えてください。

- 大変満足 満足 普通
 不満 かなり不満 (Q3も同じ評価項目)

Q2. 今回のワークショップに対して、前問のように回答した理由をお書きください。

Q3. 今回のワークショップの以下の点に対して、どのくらい満足していますか。

- ①内容 ②進行のスムーズさ
③説明の分かりやすさ ④資料の見やすさ
⑤スタッフの対応

Q4. また、アート泥団子ワークショップに参加したいと思いますか。

- 思う ややそう思う どちらでもない
 あまり思わない 思わない

Q5. ご意見・ご要望がございましたら、ご自由にお書きください。

実施日: 2022年1月23日
参加者: 7組15名(小学生7名、大人7名、年中1名)
回答数: 7件

図11 参加者アンケートの項目一覧



- 先生方もお姉さんたちも皆優しく楽しかったです。親子で夢中になって楽しめました。家でもお友達と一緒に作ってみたいと思います。
- ただの泥団子から、とてもきれいなアートに変わってとてもすばしかったです。
- 子どもと楽しくできたから。
- びかびかの泥団子を作れてうれしかったです。
- きれいな泥団子ができて、うれしかったです。
- 初めての泥団子作り、とても楽しみにしていました。普段では体験できない事を、親子で楽しく参加でき大満足です。学生の方にもたくさんお手伝いをして頂き、ピカピカになりました！！ありがとうございました(^^)

図 12 総合的な満足度 (Q 1) とその理由 (Q 2)

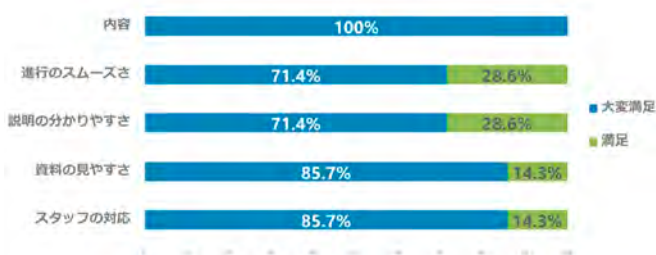


図 13 ワークショップの運営に関する満足度 (Q 3)



- またいろんな色で作ってみたいです。
- コロナ禍で大変な中、開催してくださり、ありがとうございました。
- とても楽しくできました。ありがとうございました。
- 子どもも大人も夢中になって、とても楽しかったです。もっと光ってほしかった...
- 楽しかったです。
- 色がはげてしまった所があったので、またリベンジして、自分の力でピカピカにしたいです！！

図 14 リピート傾向 (Q 4) / ご意見・ご要望 (Q 5)

表 4 学生によるワークショップの振り返り

視点	学生たちの意見
視点 1 評価できる点	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが楽しめた。 テレビや新聞など各種メディアに取り上げてもらい、ゼミの取り組みを広く知ってもらえた。 前日と当日の準備では、役割分担を決め、役割に沿ってしっかりとできた。 当日の来場者に対する対応も全般的によかった。 当日の欠席者が出た際の対応 (受付名簿への反映、座席の変更) も素早くおこなうことができた。
視点 2 改善が必要な点	<ul style="list-style-type: none"> 作りは始めるまでの冒頭の説明が長かった。 漆喰の状態が硬かった。当日、漆喰の状態を確認し、場合によっては水を足して、硬さを調整する必要があった。
視点 3 その他の気づき	<ul style="list-style-type: none"> 参加者に作り方など分からないことがあれば、自分たちで解決しないで、もっと聞いてほしかった。 他の子が成功しているのを見て、残念がっている子どもの姿があった。 団子の表面が剥げて、頑張って取り組み続ける子どもの姿があった。 団子が光るまであきらめず取り組む子どもの姿があった。 展示コーナーや各テーブルに置いたサンプルが参加者の動機付け (こんな風に作りたい) になっていた。

(「思う」)との回答を得た (図 14)。ご意見・ご要望の自由記述にも、「いろいろな色で作ってみたい」「色がはげてしまった所があったので、またリベンジしたい」といったリピート傾向を示す意見がみられた。

以上のアンケート結果を踏まえると、「子どもから大人まで多くの人にアート泥団子の魅力を体感してほしい」という学生たちの願いは、十分に実現できたといえるだろう。

6. 学生による活動の振り返り

(1) ワークショップ本番の振り返り

ワークショップ本番の翌週、「卒業課題研究」の授業において、当日の記録写真、新聞記事^{5) 6)}、参加者アンケートの結果を参考にしながら、ワークショップの振り返りをおこなった。振り返りの視点として、評価できる点、改善が必要な点、その他の気づきの3点を筆者が設定したうえで、学生による進捗で話し合いを進めた。学生たちから出された意見を表4に示す。評価できる点としては、前日準備から当日まで各自の役割を担いながら臨機応変に対応できたこと、子どもたちが楽しんで活動していたこと、各種メディアをとおして泥団子作りの魅力や取り組みの様子を広く知ってもらえたことがあげられた。改善が必要な点としては、参加者アンケートの結果でも述べたが、作り始めるまでの冒頭の説明が長かったという反省が学生からも出された。また、参加者が使用する漆喰の硬さをチェックする必要性もあげられた。この点は、漆喰の塗り重ねやすさ、つまり参加者の作りやすさに影響するため、非常に重要である。その他の気づきとしては、さまざまな思いを感じながら泥団子作りをする子どもの様子が多くあげられた。また、疑問点などをもっと聞いてほしかったという、参加者との関わりに対する思いも述べられた。

(2) 学生自身による成長の評価

アート泥団子の制作技法の習得、エルダーカレッジでのプレ・ワークショップを経て制作時間の短縮などの新たな課題が浮上、制作技法の改良と試作を繰り返す、何とかワークショップ本番を迎えることができた。そのワークショップでは、参加者だけではなく、各種メディアからも好評を得ることができた。この一連の活動を体験した学生たちに自身の成長を評価してもらった。

評価の方法は次のとおりである。まず、ここ数年の学生の実態を考慮し、学生の成長を見る指標として社会人基礎力を設定した。社会人基礎力とは、コミュニケーション能力や主体性、実行力などの「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」と定義され、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力要素から構成されている⁷⁾。測定に

あたっては、廣川ら⁸⁾が作成した社会人基礎力測定尺度を使用し、各能力要素が自分自身にどれくらい備わっていると思うかについて、「まったくない(1点)」から「非常にある(5点)」の5件法で回答を求めた。なお、学生による評価は、「卒業課題研究」開始当初の4月とワークショップ本番を終えた1月の計2回実施した。

学生による社会人基礎力の評価結果を図15に示す。学生たちの社会人基礎力は、4月に比べて1月の方が全体的に高い結果となっている。特に「前に踏み出す力」と「考え抜く力」の昇が顕著にみられた。学生たちは「アート泥団子の魅力を体験してほしい」という目標に向け、ワークショップの企画・運営をしてきた。その目標達成のために、一連の活動を自分事として捉え自ら行動するとともに、さまざまな課題を解決するための方策を考えてきた。また、自分たちが企画したワークショップで子どもたちが熱心に取り組む姿や完成して喜ぶ顔を見たり、保護者から感謝の言葉をもらったりもした。他の授業や実習などの効果を統制できていないため、結果の解釈は慎重におこなう必要があるが、こうした経験が学生たちの社会人基礎力の評価に影響していると考えられる。

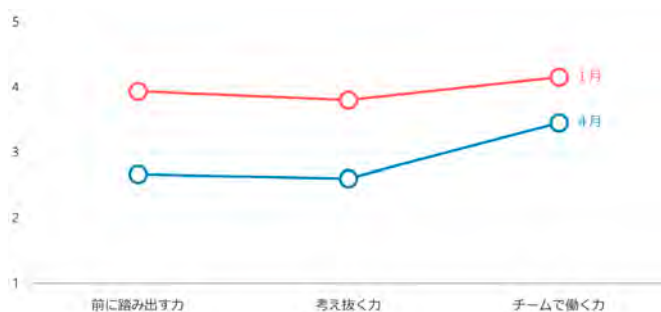


図15 学生による社人基礎力の評価

7. おわりに

2021年度の「卒業課題研究」では、「アート泥団子の魅力発信プロジェクト」と称して、学生たちを中心にアート泥団子ワークショップの企画・運営をおこなってきた。最後に、指導教員の立場から1年間の活動を振り返り、今後の課題と展望についてまとめておく。

短大教育の中で学生たちが試行錯誤しながら、主体的に活動する姿を導きだすことをねらって、ワークショップの企画・運営という方法を採用した。1年間を振り返ると、前期当初は受動的だった彼らが、後期になると自ら考えて動くようになるなど、主体性やチームワークが磨かれたように感じるようになった。この所感は学生自身による成長評価とも一致しており、今回の成果の

g ワークショップ本番の振り返りをした後、学生たちに回答を依頼した。

1つといえるだろう。ただ、学生たちの成長につながる実践になった一方で、教員側からの提案を学生たちが受けとめ、それを膨らませていく形で進行する場面もしばしばみられた。今後もワークショップの企画・運営という学生が主体となる取り組みを継続しながら、活動の推進役を教員から徐々に学生へ移行していくことが課題である。

また、アート泥団子ワークショップの参加者アンケートの結果から、改めて泥団子作りは誰でも楽しめる遊びだと認識することができた。今回のワークショップの対象であった小学生はもちろん、大人までも夢中にさせる魅力を秘めている。子どもも大人も分け隔てなく、おしゃべりしながら、見せあいっこしながら、カラフルでぴかぴか光る美しい泥団子を作っていく。泥団子作りを共通のテーマとして、学年や学校、地域や世代を越えた交流の広がりが期待できるのではないだろうか。今後はアート泥団子の魅力発信に加えて、地域・世代を超えた体験・交流活動の活性化を中心的なテーマとし、活動していきたい。そのため、2022年度の卒業課題研究では、大学を飛び出し県内各地でのワークショップの開催や短大生と中・高生によるワークショップの共同運営を実現させたいと考えている。

謝辞

本稿で報告した「卒業課題研究」における取組みの一部は、令和2年度日本教育公務員弘済会佐賀支部奨励金、令和3年度佐賀県青少年育成県民会議子どもたちの体験活動「志 taiken」支援事業補助金の助成を受けて実施した。

引用・参考文献

- 1) 春原淑雄：保育内容「環境」に関する教材研究－光る泥団子をテーマとした「卒業課題研究」における取り組み，西九州大学短期大学部紀要，第52巻，73-82（2022）
- 2) 中野民夫：“ワークショップ：新しい学びと創造の場”（2001），（岩波書店）
- 3) 槇英子・仲本美央・瀧直也・松山恵美子：“絵本でつくるワークショップ体感しよう絵本の世界”（2014），（萌文書林）
- 4) 西九州大学短期大学部：卒業生勤務状況調査，（2019）
- 5) 佐賀新聞：カラフル泥団子光ったよ！西九大短大でワークショップ，2022/01/26（水朝刊，15面）
- 6) 西日本新聞：アート泥団子親子15人熱中，2022/01/24（月朝刊，16面）

- 7) 経済産業省：社会人基礎力に関する研究会－中間取りまとめ－，(2006)
- 8) 廣川佳子・大嶋玲未・宮崎弦太・芳賀繁：大学生の社会人基礎力における因子不変性の検討，立教大学心理学研究，第 58 卷，1-11 (2016)